Charles Piot,

Remotely Global: Village Modernity in West Africa.

Chicago: University of Chicago Press, 1999, xiii＋220pp.

武内進一

I

優れた書物は想像力を掻きたてる。本書は読者の想像力を掻きたてて止まない，魅力的な民族誌である。著者は，トーゴ北部のカブレ(Kabre)社会を対象として，1980年代初頭から人類学的調査を継続してきた。カブレ社会が位置する西アフリカのサバンナ地帯は，フォーテス(M. Fortes)やグリオール(M. Griaule)など著名な人類学者の調査地が点在している。著者は，これら高名な著作に描かれた静的なアフリカ社会の姿に異議を唱え，「古典的な，辺鄙な場所の再理論化」(p. 1)を試みている。良質の民族誌の例に漏れず，本書には読者の問題意識に突き刺さる示唆に富んだ指摘が散りばめられている。

本書の特徴は，ひとつのアフリカ農村社会の内的論理をポジティヴに描き出したことにある。オーソドックスな人類学の手法である参与観察調査を通じた豊富な知見に依拠しつつ，近年のポストコロニアル思潮を取り込んだ本書の分析は刺激的であり，かつ説得的である。評者は人類学を専攻とする者ではないが，現代アフリカにおける政治経済現象の分析に対して重要な問題を提起する本書は，ここで書評として取り上げる意義があると考えた。

II

まず順を追って本書の内容を紹介する。構成は次の通りである。

第1章　序
第2章　歴史：大西洋奴隷貿易から権力の凡庸さへ
第3章　交換：欲求の経済における価値のヒエラルキー
第4章　人格：主体の生み出し，見せ物としての儀礼
第5章　家：二項対立の崩壊，異邦人の統治
第6章　コミュニティー：精霊，擬態，近代
第7章　ディアスポラ：互酬的欲求，循環する物語，超自然的論争
第8章　カブレの近代

第1章は，分析視角の提示と先行理論の検討にあてられている。著者の立場は，本書冒頭に簡潔に示されている。すなわち，カブレ社会は一見したところ自給農業，贈与経済，精霊に向けた儀礼など，いわゆる伝統社会の特徴を色濃く残し，しかもその特質は近年むしろ強まっている。著者はこうしたカブレ社会を，誕生の際からすでにグローバルな性格を持った，近代の産物と捉える。それは従属論がいうような，資本主義的先進社会の裏側の低開発社会という意味ではない。今日の社会は，カブレの内的論理が展開した結果形成されたものであり，カブレの人々はそこで「心地よく暮らして」(p. 1)いるというのが，著者の主張である。

その上で，アフリカ社会に対する従来の分析視角が検討され，それらがいずれも個人主義的な認識枠組みという共通の難点を持つことが指摘される。フォーテスらの構造機能主義人類学，メイヤスー(C. Meillassoux)らのマルクス主義人類学，またブルデュー(P. Bourdieu)の実践理論が取り上げられるが，著者によれば，それらの理論はいずれも社会の構成主体が原子状に分割可能で，かつそれらが自律的な意志決定を行うとの暗黙の前提に基づいている。これは，西欧近代の個人主義的イデオロギーに他ならず，アフリカ社会にそのまま適用することはできないし，そもそも社会分析のツールとして重大な問題を孕んでいる。

第2章では，カブレ社会の歴史が辿られる。神話，

口頭伝承，植民地文書などの「断片」(p. 29) から構成された歴史が示すのは，カブレ社会がその誕生の時から外部世界との接触を続けてきたこと，まさに近代のなかで生まれ育ったことである。カブレの創世神話に描かれているのは，アシャンティ (Ashanti) とダホメ (Dahomey) という奴隷貿易で栄えた2つの王国の狭間で，奴隷狩りを逃れて山岳地域に逃げ込んだ祖先の姿である。近代を特徴づける奴隷貿易のなかでカブレ社会が産声を上げたことに，著者は特に注意を向けている。

第3章以降が社会分析に当てられ，まずカブレ社会において顕著に観察される贈与について論じられる。カブレ社会では，現金収入の大半が贈り物のために使われるほど頻繁に贈与が交換されるが，それは効用の交換ではなく，社会関係を構築したいという欲求に基づく行為である。贈与交換は，常に差異を，したがってヒエラルキーをつくり出す。カブレ社会では，交換を通じた様々な関係 (relationship) の網が人々の間に張り巡らされており，そうした関係を構築することに高い社会的価値が置かれている。ここでは，自己は他者から独立した自律的存在ではなく，むしろ他者との「諸関係に他ならない」(p. 66) のである。

他方，そうした関係を拒絶する者は邪術師（ウイッチ）として忌避される。カブレの語りでは，近年ウイッチの数が増え，また凶悪化しているが，これは資本主義経済の浸透と明らかな関連がある。資本家的蓄積がウイッチと結びつけて解釈されるのである。ただし，商品交換の活発化は，単にウイッチを増殖させるのではなく，そこで得た資金を儀礼に投入するという形で，贈与そして儀礼を活発化させている。商品交換と贈与とは，単に共存するのみならず，互いに支え合い，強化しあっている。贈与は，前近代社会の遺物では決してないのである。

原子論的な自立した個人を前提できないとすれば，カブレ社会において人格はどのように形成されるのか。この問いに答えるのが第4章である。カブレ社会では，子供は両性具有と考えられている。それは，社会的に定義されたジェンダーの規範を越えて行動するからである。両性具有者は自己充足的であり，その意味で「完全」である。カブレ社会は，そこから単性の「不完全」な人格を，あたかも一本の丸太から木像を彫り出すように，儀礼を通じて形づくっていく。性的な差異を有する「不完全」な人格は，相互に欲求を抱き，また依存しあう関係を持つために必要なのだ。その上で，この成人儀礼もまた近代に生まれたことが指摘される。複雑な男子儀礼は，もともと奴隷貿易期の共同体防衛のための動員を起源としているのである。

人々の間に結ばれる諸関係の最小単位である家で，構成員が持つ関係について論じるのが第5章である。家を単位とした労働のなかで最も重要な食糧生産は，ジェンダーに応じて分業化されており，男性が耕作を，女性が調理と市場での販売を行う。性的な差異は，家空間をめぐっても象徴的に体系化されている。重要なのは，「男性の血液は女性労働の産物であり，女性の子宮は男性労働の産物」(p. 119) だという語りに表現されるように，かかる性的差異が単なる二項対立ではなく，相互に依存した補完関係として認識されていることである。また，差異が生みだすヒエラルキーは，例えば「男」と「女」，「年長者」と「年少者」といったカテゴリー的な関係よりも，人格的な関係に基盤を置き，したがってそれは流動的である。カブレ社会にも確かに男性優越思想はあるが，日常的に重要なのは「男性」，「女性」などのカテゴリーよりも個々の人格であり，カテゴリーの差異に対応した理念的なヒエラルキーは個々の人格の実践に対応して容易に逆転するのである。

第6章では，コミュニティーという社会的単位を取り上げ，その性格とそこで人々の連帯を保証するものは何かが考察される。構造機能主義において，コミュニティーを規定するものは出自だと論じられた。しかし著者は，カブレ社会でコミュニティーの連帯を支えているのは，こうした実在的条件ではなく，精霊への信仰だと主張する。1年を通じて度々行われる儀礼への参加を通じて，コミュニティーが定義され，再生産されるのである。コミュニティーに属する全ての家は儀礼の際に何らかの役割を担っており，その意味では儀礼に統合されている。ただし儀礼は，社会関係を強固にし，連帯を強めるとい

うよりも，むしろ社会における差異を確認する。コミュニティーを構成する半族（moiety）に付されたジェンダーの記号は儀礼によって確認され，したがって集団を差異化し，分離する方向に作用するのである。儀礼はコミュニティーの連帯を強めるために存在するのではなく，「紛争をつくり出す」(p. 153) のだが，著者はこれを差異化過程の必要かつポジティヴな部分と見る。コミュニティーの性格は，構造機能主義者が考えるよりもずっと流動的であり，むしろカブレを労働力プールと見なした植民地当局の思惑に合致するものだった。カブレの成員は周辺地域，南部，あるいは都市など様々な場へ広がっているが，これは単に植民地当局によってコミュニティーの構造が歪められたためというよりは，もともとカブレ社会が持っていた流動的な性格が影響している。

移動したカブレのコミュニティー――ディアスポラ――については，第7章で扱われる。カブレは北部山岳地帯をもともとの居住地として，そこから中部平野，さらには南部へと居住地を広げてきた。ディアスポラの展開は，カブレのアイデンティティーに関連して興味深い現象を引き起こした。カブレ・コミュニティーを構成する半族は男と女の象徴性を付されており，半族の成員は，実際の性別とは関わりなく，象徴的な性別のアイデンティティーを持っている。そして，かかる象徴性は北部山岳地帯(男)と中部平野（女），北・中部（男）と南部（女）といった具合に地域間においても重層的に関係づけられているために，個人の象徴的な性別が相手の出身地に対応して変化することになる。これに典型的に示されるように，カブレ社会では個人のアイデンティティーもまた流動的な性格を有している。

終章の第8章では，本書の議論がまとめられる。著者はここで，カブレ社会に顕著に見られる文化混淆性は，単に植民地主義に由来するものではないことを改めて主張する。植民地期の影響はむろん無視できないが，現在のカブレ社会の特質には，近代の成立とともに生まれ，その中で常に外部世界の収用（appropriation）に努めてきた彼らの内発的な意志と論理が投影されている。

III

“Remotely Global” という本書のタイトルには仕掛けがある。評者は当初タイトルに惹かれて本書を手にしたのだが，近年のグローバリゼーションがアフリカ農村にもたらした変容を論じたものと予想していた。しかし，本書の主眼は近年のグローバル化には置かれていない。本書の主張は，一般的な通念からは「伝統社会」としか見えないアフリカ農村が，実のところ近代とともに生まれ，その誕生時から「グローバル」であったということである。描かれているのは，近年の変容というよりは，一貫して流れる社会論理なのだ。

カブレの社会論理として重要視されるのは，関係性，補完性，流動性といった概念である。これらの論理を通じて，異なる人格の間を活発に結び，また外部権力を不断に収用する運動が生じる一方，形成されたヒエラルキーは固定化せず，それを無化する力学が常に作用する。著者がカブレ社会から抽出する論理は，他のアフリカ農村における社会論理を考える上でも示唆に富んでいる。

社会に内在する論理を摑もうとする著者の姿勢は，認識論的立場の厳しさとしても現れている。それは研究手法の倫理性に対する厳密な態度といってもよい。そうした態度は，単にそれがポストコロニアル思潮の主要な論点だからというだけでなく，著者がしばしば吐露するとおり，調査対象であるカブレ社会に対する深い愛情，ポジティヴな印象に由来している。関係構築を重視するカブレ社会の価値観を「効用」や「機能」に還元しても得るところが少ないと述べ，そうした個人主義に立脚した理解を「認識論上の暴力であり，植民地化」(p. 171) だと断じるくだりは非常に魅力的である。

こうした姿勢に基づく本書の分析では，豊富なフィールドワークに培われた鋭い知見が幾つも示される。とりわけ印象的なのは，近年の儀礼活動の高まりに関する説明である。コミュニティーが分散し，南部にディアスポラが生まれる。彼らは，象徴体系上劣位に位置づけられるが，商品交換による蓄積の

機会には恵まれている。北部のコミュニティーは優位性を誇示するため儀礼を活発化させる一方，南部は自己の正統性を高めるためにそこに富を注入する。地域間の緊張関係のなかで儀礼活動が活発化するという本書で展開される論理（pp. 162-163）は，非常に説得的である。近年のアフリカでは，政治や社会に関わる「再伝統化」の動きがしばしば報告されているが，地域の歴史や文化に通暁した「厚い記述」のなかでこそ，かかる変容を説明する明晰な論理を紡ぎ出すことができる。人類学の強みが存分に発揮された分析といえよう。

他方，本書のキー概念のひとつである「近代」に関しては，若干疑問に感じる点があった。本書の主要な議論は，カブレ社会がまさに近代の産物であり，その一部をなしているという点であった。奴隷貿易期に発するカブレの歴史がその議論の前提にある。その点は理解できるのだが，今日に至るカブレの動態を考えるとき，「近代」をある程度時期区分して論じる必要があるのではないだろうか，とも感じた。奴隷貿易期という「近代」はカブレ社会に逃亡と山岳地帯への避難という影響をもたらし，植民地期という「近代」は居住地の拡散とディアスポラの形成をもたらした。そして，独立以降の「近代」もまた別の影響をカブレ社会に与えたはずである。

評者の疑問は，近代国家の影響をどのように議論に組み込むのかという点に集約される。本書の議論では，カブレの内発的な社会論理に焦点が当てられる一方で，近代国家の影響にはあまり力点が置かれていない。もともと無頭制社会であったカブレは，植民地政府に要求してチーフ職を設置させるのだが，チーフは儀礼との関係で特に重要な役割を担っていない。また，1965年以降トーゴの政治権力を握るエヤデマ大統領はカブレ人だが，カブレの儀礼を利用しようとする彼の試みはあまり成功していない。このように，カブレ社会への近代国家の影響は，本書を読む限りどちらかといえばマージナルな領域に留まっている。

しかし，一般にアフリカにおいて近代国家の影響は甚大であるだけに，もう少しこの点について踏み込んだ検討があっても良かったのではないか。特にエヤデマ政権期の国家機構には多数のカブレ出身者が参加しているはずであり，その意味でそれは単なる「外部権力」ではないであろう。また，村の中にも中央と強い結びつきを持つ者がいるはずだが，彼らが有する政治経済的な権力は，儀礼の領域に何らかの影響を及ぼしてはいないのだろうか。南部と北部の間に，「富」と「精霊」との緊張関係があるように，北部農村社会のなかにも「国家」と「精霊」との日常的な緊張関係があるのではないだろうか。本書の主眼がカブレにおける社会論理の摘出に置かれていることは理解できるが，儀礼の活発化をめぐる動学を鋭く分析した著者に，農村社会に対する近代国家の作用を体系的に分析してほしいとも思った。

ともあれ，本書が魅力的な民族誌であることは疑いない。アフリカ社会の論理という大きな課題に正面から取り組んだ著者に敬意を表するとともに，本書が広く読まれることを期待したい。

（アジア経済研究所地域研究第２部副主任研究員）